とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都＊＊＊
園名	アスク上高井戸保育園

1．活動のテーマ

<テーマ>

～五感と音～

<テーマの設定理由>

聴覚だけでなく、楽器を鳴らす際の触覚や素材の色彩（視覚）、漂う香り（嗅覚）など、五感すべてで音を享受する体験を目指す。 本園では、日頃から五感を刺激する玩具や素材を揃え、子どもが自発的に触れて試行錯誤できる環境を構築してきた。こうした日常的に感覚を育む保育環境と、子どもの気づきや興味を丁寧に広げる本園の強みを活かし、「すくわくプログラム」を導入することで、これまでの活動をより発展的な学びへとつなげていく。

2．活動スケジュール

6月から1月まで月に1回音楽講師を招致し本物の楽器や音楽、歌に触れながら知識を深めた。また、その時点での子どもたちの興味関心をもとに、保育士が問いかけや内容を考えた。次月行う問いに関しては保育士と講師で内容を相談し進めた。
6月：くれよんのくろくん
7月：擬音表現
8月：擬音表現・喜怒哀楽
9月：身近な音・楽器で会話をしてみよう
10月：楽器遊び・音探し
11月：楽器遊び・擬音表現
12月：楽器遊び・話作り
1月：身近な音探し・楽器遊び

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
・ハンドウッドブロック … 音色の違いを知るために使用
・カスタネット木製/ブームワッカー … 音色の違いを知るために使用
・トライアングル/ベルハーモニー … 音色の違いを知るために使用
・ミュージックパッド（和音） … 音色の違いを知るために使用
・鳴子 … 音色の違いを知るために使用
→活動によって楽器の種類を使い分けてそれぞれの良さや音の違いがわかるようにした
・キッズ和太鼓…五感を刺激する音を感じられるようにするために使用
・水鉄砲 … 水鉄砲を用いて、様々なものに当たる音は手でたたくのとどんな音の違いがある
か探究し聴覚を意識するために使用
・風車セット10本組 … 風車が回ることを通して風が吹いた時の肌の感触や風の音を感じ取るために使用

・小学館の図鑑NEO 音楽 … どのような楽器があるかや音の鳴らし方の種類を探究活動内で調べるために使用

４．探究活動の実践

【3歳児実施分】
問いを考える:「がちゃがちゃどんどん」という慣れ親しんだ絵本を導入とし「どんな色をしているか？」「どんな形をしているか？」「どんな動きがつけられるか？」などを問いかけていった。楽器や色水、生活音、スカーフなど子どもたちの興味がひけるものを題材とし、表現の幅を広げていった。

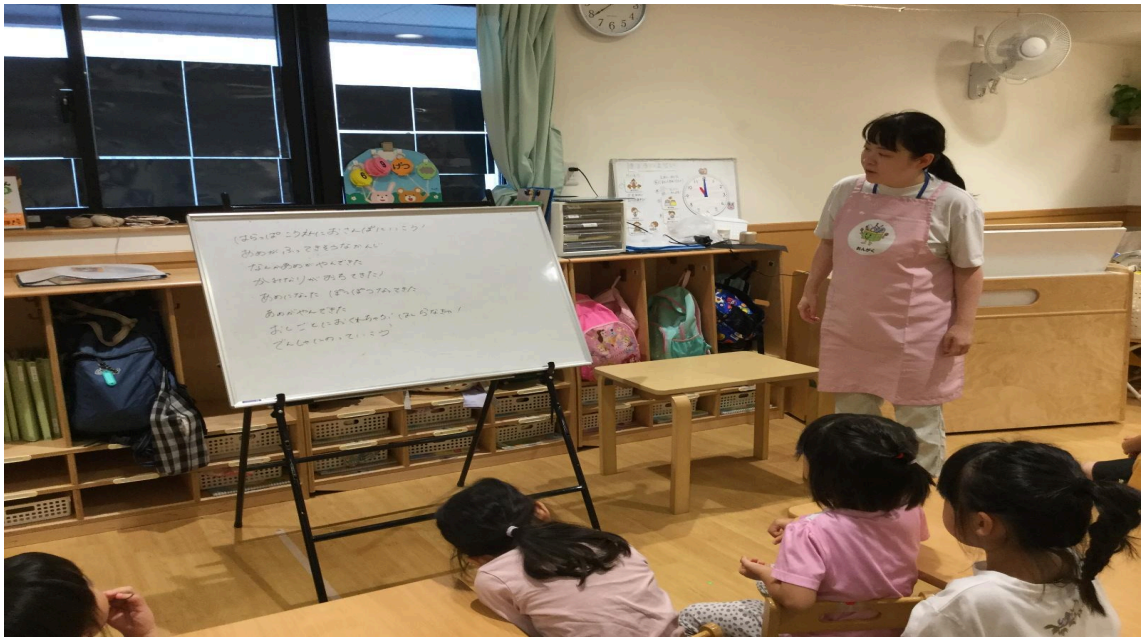
探究活動の様子：導入としていろいろな擬音が出てくる絵本を読んだ。絵本の中から「ガチャガチャ」や「ドンドン」などの擬音を動きで表現した後スカーフを投げたり、端を持ってなびかせたりなど表現の幅を広げていった。
クルクル回ったり跳ねたりして友だちと一緒に表現うることを楽しんでいた。「かんかん」という擬音では寝転がって絵本の中のイラストの「W」の文字を再現したり、「どんかん」という絵本にはない擬音を提案し、その表現を作り出したりしていた。
様々な形や色を見て音を聞いて各々が感じたままに体を使って表現することを楽しんでいた。身の回りの音当てクイズでは、パトカーのサイレンや雨の音などをスピーカで流し「何の音？」「どんな動きをするか？」などと問いかけると、保育士や他児の動きを見て真似したり、自分でその音に合わせて動きを作って表現したりしていた。身近な音を耳をにすると「これは何の音？」と想像を膨らませながら楽しむ姿が見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：身近な音に興味・関心を向ける姿があった。各々音から想像して日常の音に当てはめながら楽しむ姿があった。自分でその音に合わせて動きを付けたり、他児の真似をしたりして全力で取り組む姿が見られた。
絵本を読むときに、擬音に合わせた音楽があることで、絵本の世界に引き込まれていく様子が見られた。今回は、擬音を動きで表現するということだったが、始めは参加できなかった子どもも、少しずつ参加でき、表現することを楽しめていたようだった。
身近な音に興味・関心を向ける姿があった。自分で音に合わせて動きを付けたり、他児の真似をしたりして楽しみながら意欲的に参加する姿が見られた。

【4歳児実施分】
問いを考える： 活動を進める中で、子どもたちが音の違いや感じ方に気づき、子どもたちが自分なりに表現できるような問いかけを意識した。楽器遊びでは、「この音は楽しい音？悲しい音？」「指の数を減らしたら音の大きさはどうなる？」など子どもが音を集中して聞けるような問いかけもした。
また、音楽を聞き、子どもたちが物語のイメージを膨らませて絵を描く活動では、「どんな音に聞こえる？」「水みたいな音がするね」など音をイメージしやすいような問いかけを心掛けていった。

探究活動の様子：
4歳児の探究は、感情の理由を深掘りすることから始まりました。6月には、音楽を聴いて「おもしろい」と感じた理由を絵本の表情とリンクさせて言葉にし、自分の感覚を客観的に捉える経験を積みました。
7月、色を選ぶ活動では、「好きな色」を選びたい欲求を抑え、曲の雰囲気から「夜みたい」「眠そう」と理由を見出し、紫を選ぶ姿が見られました。これは、自己中心的な欲求から「表現としての選択」へと一歩踏み出した、年中期ならではの成長の証です。
8月から、楽器は「イメージの翻訳機」となりました。ピアノの強弱に合わせるだけでなく、「サンタの足音」「ビー玉の転がり」と比喩を用いて表現する子が現れました。9月には、同じ動物を選んでも「鳴らし方の違い」を認め合うことで、多様性の理解が深まりました。
10月、ナレーションに合わせた即興演奏では、状況判断力が光りました。「食べられそう！」という危機的なシーンでは、表情や身体の動きも同時に変化させ、全身を使って物語の世界に没入する**「総合的な表現力」**の向上が見られました。
11月、子どもたちは自分たちで場面を考え、音を当てる「共同制作」に挑みました。役ごとに分かれ、他者の音を聴きながら自分のタイミングで鳴らす。この「物語を音で完成させる」経験は、達成感と共に強い一体感を生みました。
12月・1月には、カスタネットを「口」に見立ててパクパク鳴らすなど、楽器の物性を生かした描写が定着。同じ楽器でも、撫でる、叩く、振るといった「奏法の工夫」を自分たちで発見し、一つの楽器から複数の「言葉（音）」を引き出す探究が、年度末まで力強く続きました。
ふりかえり（保育士の気づき）：音楽を通して色々な音を子どもたちが自由に感じ取り表現できる活動だったと感じた。同じ音楽を聞いても子どもたちの感性や想像力によって全く違う表現になるのだと感じることができた。また、音を可視化したことで探究活動にも意欲的に参加してくれることが多かった。すくわくの中で子どもたちが自分の感じ取ったものを表現し、他の子と同じにならないものにできたので良かった。今後も音楽を通して子どもたちが自分の感じたことを自由に表現できる環境を大切にしながら、感性や表現する楽しさを育んでいきたい

【5歳児実施分】
問いを考える：5歳児クラスでは、個の感じ方を超え、「他者とイメージを共有し、一つの世界を創り出すこと」を問いの柱に据えました。
導入期には「この音に正解はあるかな？」と問いかけ、心理的な安全性を保障することで、自由な発言を引き出しました。中盤には「和音の数や重なりで、心はどう動く？」と問い、音の物理的な変化と内面の変化をリンクさせる科学的・感性的な探究を促しました。終盤は「友達とイメージを合わせるにはどうしたらいい？」と問い、自分のこだわりと他者の意見を調整しながら、一つの物語を完成させる協働的な対話を重視しました。これらの問いを通じて、表現を「自分たちのもの」として主体的に動かす力を育みました。
探究活動の様子：
5歳児クラスでは、個の感じ方を超え、「他者とイメージを共有し、一つの世界を創り出すこと」を問いの柱に据えました。
導入期には「この音に正解はあるかな？」と問いかけ、心理的な安全性を保障することで、自由な発言を引き出しました。中盤には「和音の数や重なりで、心はどう動く？」と問い、音の物理的な変化と内面の変化をリンクさせる科学的・感性的な探究を促しました。終盤は「友達とイメージを合わせるにはどうしたらいい？」と問い、自分のこだわりと他者の意見を調整しながら、一つの物語を完成させる協働的な対話を重視しました。これらの問いを通じて、表現を「自分たちのもの」として主体的に動かす力を育みました。
6月、正解のない自由な表現活動を通じて、慎重だった子も少しずつ自分の言葉で語り始めました。7月には曲調の変化を敏感に察知し、スカーフを重ねて色の変化（混色や層）で表現するなど、「時間の経過」を視覚化する高度な探究が見られました。
8月には楽器の奏法を自ら発明し、嬉しい・悲しい等の感情を音に変換しました。9月のハンドベルを用いた活動では、3音から4音へと和音を厚くすることで、「強い」「怖い」といった、より複雑で解釈の幅が広いイメージを引き出しました。音の数という数値的な変化が、想像力に奥行きを与えることを発見する機会となりました。
10月以降は、物語作りを通じた「協働」が深化しました。当初は個々に鳴らすだけだった姿が、講師の模範や保育者の言葉添えを経て、「鳴らし方の工夫」へと変化しました。12月にはグループ内で相談し、共通のイメージに向けて音を重ねる姿が見られ、個の表現が集団の表現へと昇華されました。
1月には、自分の理想とする音を求めて楽器と向き合い、言葉にならないイメージを講師や保育者と共有しながら「音を探し当てる」探究的なプロセスを経て、仲間と共に物語を奏でる達成感を味わいました。
ふりかえり（保育士の気づき）：5歳児の1年間は、音という媒体で自ら物語を編み出す「プロデュース力」を育む過程でした。和音の変化から複雑なイメージを言語化する探究心の深まりや、正解のない表現の中で仲間と意見を出し合い、一つの世界を創り上げる質の高い協働へと発展しました。内なるイメージを音で分かち合い、共感し合った経験は、就学前の重要な自己効力感と対人スキルの土台となり、新たな環境へ踏み出す自信に繋がったと確信しています。



とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	練馬区練馬3丁目４-５
園名	アスクねりま三丁目保育園

１．活動のテーマ

<テーマ>

きみの「できる！」をさがそう！

<テーマの設定理由>

自園では、子どもたちの『やりたい』を尊重して安全に配慮しながら身体を動かせるようにし、その中で発達に合わせた遊びを選択して子どもたちが満足に体を動かせるようにしている。
すくわくを活用し、身体を動かす遊びから発展的な学びを行いたいと考えているため。

２．活動スケジュール

6月から1月まで行い、月に 1 回専門講師を招致し身体の動かし方を講師や保育士とともに探究し学びに繋がるようにした。また集団として行うのではなく少人数グループで行うと共に、『きみの「できる！」』というテーマに沿ってひとりひとりの発達や興味に沿った活動展開をしていく事の出来るようにしました。6・7月は必要な身体の動かし方を探求し、8・9・10月にはひとりひとりの「できる！」を見つけ運動会で発表をし、11・12月には発表をしたことを発展させる等、運動会から広がった興味に沿った活動を行い。1月にはそれを発表を行いました。
6.7月：必要な身体の動かし方を探求
8.9.10月：とりひとりの「できる！」を見つけおこなってみる
11.12月：発表をしたことを発展

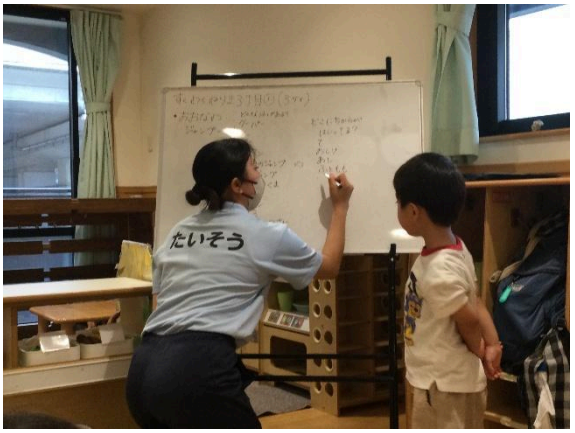
３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・ホワイトボード/ホワイトボードペン・・・探究活動の際、出てきた意見を書きとめるのに使用
・フラットマーカー・・・目印として使用
・マット・・・4歳児跳び箱/5歳児マット運動に使用
・跳び箱・・・4歳児すくわくテーマとして使用
・大縄・・・3歳児すくわくテーマの中で『縄跳びを自分の跳び方で跳ぶ』為に使用
・なわとびポールスタンド・・・大縄を安全保管する為に使用
・台・・・4歳児跳び箱の導入として使用

４．探究活動の実践

【3歳児実施分】
問いを考える
まず縄を跳ぶにはどんな力が必要なのかを、講師と一緒に考えました。次にジャンプをするには『どこの力が必要か』を考えました。実際にこどもたちに伝わりやすく、考えやすいよう動物で例えながら考えました。
探究活動の様子
縄を跳ぶにはどんな力が必要なのかを子どもたちに問うと子どもたちみんな「あし！！」と最初は答えていました。その後、本当に足の力だけでいいのか？手を使うとなにかかわるのか？などと問いを広げながら実際にジャンプをしてみて一緒に考えました。すると子どもたちの「かえるみたい」「うさぎさんみたい」とこどもからもアイディアや意見が出始めて今度は動物になりきっていろいろなジャンプをしました。この時期には日常の保育の中でも動物ジャンプ競争や動物になりきって遊ぶ姿が多くありました。
次に実際に止まった縄の上を色々な跳び方でジャンプをしました。止まった縄でもしっかり縄を見て縄の場所を確認することが必要と言うことにかが付くことができました。そして縄を跳ぶには足を開いての「パー」がいいのか、それとも足を閉じて「グー」がいいのか考えました。こどもたちから「グーのほうが跳びやすい」という意見が出ました。
その後、徐々に小波でのジャンプ、縄を回してのジャンプと…自分のできる跳び方で縄を跳ぶことにチャレンジしました。園庭に出ると「大縄やりたい！！」とこどもたちからリクエストがある程人気でした。お友だちに合わせることや、強制されるのではなく「きみ(自分)のできる」を大切に一人ひとりの跳び方を認め沢山褒め、認めを行っていく事でやる気を促し楽しく行えるようにした。運動会に繋げ保護者の方にも発表できる機会を設けたことで保護者の方に活動を知っていただく事と共に、子どもたちの意欲を育むことができた。
運動会後はより難しい跳び方で跳ぼうとする子や、今できている跳び方でとべる回数を増やそうとする子がいた。体操だけでなく日常の中でも行うことでより子どもたちの探求心を深めることができた。1月の締めくくりでは、子ども同士で見せ合いをすることでお互いを認め、「一緒にやりたい」等があった

ふりかえり(保育士の気づき)
日常の保育の中でも行っている『大縄』。通常では得意な子ばかりになってしまいがちだが、今回ひとつひとつの動きを分かりやすくかみ砕いて、講師・保育士・こどもで話し合いながら行ったことで、身体を動かすことを苦手としている子も積極的に参加することができた。また、大縄という3歳には難しいテーマではあったが『きみの「できる！」をさがそう！』というテーマにすることで一人ひとりができる跳び方で挑戦することが出きた。子どもたちの意欲や探求心を育むにはひとつひとつの動きを細かく考え、こどもたちからも意見を引き出し行っていく必要があるとかんじた。



問いを考える
まず跳び箱を跳ぶにはどんな力が必要なのかを、講師と一緒に考えました。次に高く飛ぶにはどうやってジャンプをするのがいいのかを考えました。実際にこどもたちに伝わりやすく、考えやすいよう身体を動かしながら考えました。

探究活動の様子
縄を跳ぶにはどんな力が必要なのかを子どもたちに問うと子どもたちみんな「あし！！」と最初は答えていました。その後、本当に足の力だけでいいのか？手を使うとなにかかわるのか？などと問いを広げながら実際にジャンプをしてみて一緒に考えました。すると子どもたちの「かえるみたい」「うさぎさんみたい」とこどもからもアイディアや意見が出始めて今度は動物になりきっていろいろなジャンプをしました。この時期には日常の保育の中でも動物ジャンプ競争や動物になりきって遊ぶ姿が多くありました。
次に実際に止まった縄の上を色々な跳び方でジャンプをしました。止まった縄でもしっかり縄を見て縄の場所を確認することが必要と言うことにかが付くことができました。そして縄を跳ぶには足を開いての「パー」がいいのか、それとも足を閉じて「グー」がいいのか考えました。こどもたちから「グーのほうが跳びやすい」という意見が出ました。
その後、徐々に小波でのジャンプ、縄を回してのジャンプと…自分のできる跳び方で縄を跳ぶことにチャレンジしました。園庭に出ると「大縄やりたい！！」とこどもたちからリクエストがある程人気でした。お友だちに合わせることや、強制されるのではなく「きみ(自分)のできる」を大切に一人ひとりの跳び方を認め沢山褒め、認めを行っていく事でやる気を促し楽しく行えるようにした。運動会に繋げ保護者の方にも発表できる機会を設けたことで保護者の方に活動を知っていただく事と共に、子どもたちの意欲を育むことができた。
運動会後はより難しい跳び方で跳ぼうとする子や、今できている跳び方でとべる回数を増やそうとする子がいた。体操の時間だけでなく日常の中でも行うことでより子どもたちの探求心を深めることができた。
1月の締めくくりでは、子どもたち同士で見せ合いをすることでお互いを認め、「一緒にやりたい」等楽しみながら参加していた。

ふりかえり(保育士の気づき)
初めは跳ぶことにとらわれている子も多く怖がってしまう子も多くいたが、細かく一つ一つの動きをおさらいしながら行っていくことで恐怖心を払拭できているようだった。「きみのできる」というところで『跳ぶ』という事にこだわらない事で意欲的に楽しく取り組むことができていた。

【5歳児実施分】
問いを考える
年長児では年中のころからマット運動を中心にたいそうを行ってきたため、より丁寧にマット運動に必要な力は何か、マット運動の中にはどんな体の動かし方があるのか、どのような技があるのかを講師・保育士と一緒に考えました。その上で『できそうな技』『やってみたい技』に分けて考えました。

探究活動の様子
まずは、「マットをするのにはどんな力が必要か」を考えました。「押す力」「バランスをとる力」「体をささえるちから」「蹴る力」と様々な力が必要なことを知りました。次に、講師がマットでできる技にはどのような技があるのか、前転・後転・開脚前転・倒立前転・側転などを見せてくれました。「こんな技ができるんだー」と知らない技に興味津々なこどもたち。その中から「できそうな技」と「やってみたい技」を考えました。
6・7月で学んだ技の中から選んだ「できそうな技」を8・9・10月でそれぞれの選んだ技に必要な力を少人数グループに分かれて考え学び行った。10月の運動会ではそれぞれの「できそうな技」を披露したことで「できそうな技」から「できる技」になり自信がついたようだった。11・12月には『やってみたい技』にチャレンジをした。『できそうな技』と同様に少人数グループに分かれて力の入れ方や、一つ一つの細かい動きも確認しながら行うようにした。また、できる子が見本を見せて上げたりコツを教えてあげたりする姿もあった。1月には『やってみたい技』の発表を行った。

ふりかえり(保育士の気づき)
初めに子どもたちに「できそうな技」「やってみたい技」を分けて問いかけることで『できそうな技』から行うことができた。『できそう』と思っている技から取り組むことで楽しみながら行うことができているようだった。年中のころから行っていたマット運動を発展させることで子どもたちも身近な運動でたくさんの技ができることを知り興味を引き出すことができた。講師の見本を見て行う中で憧れる気持ちやできた時には達成感や自信をつけることができた。一つ一つの動きを分解し理解しながら身体を動かすことで一見難しそうに見える技もできるようになっていた。